

【田代】これより第2部のパネルディスカッションに入っております。本日のパネリストは市民団体からトランジションタウンの荒川紀子さん。あおばこどもの居場所の水胤恵美子さん。企業からはセカンドファクトリー副社長の齋藤善寛さん。そして高野律雄府中市長。第1部に引き続きまして株式会社アズママの甲田恵子さんをお呼びしています。それぞれの団体活動での成功している部分や課題、また企業として行う市民活動の意義などを伺いながら、市長や甲田さんにも感想や、それぞれの立場からのご意見も織り交ぜて進めてまいります。ここからは進行役として、コーディネーターを林瑞恵さんをお願いいたします。

【林】市民の立場から、市民の目線で、皆さんに市民協働の形や、それにかかる想いを尋ねていきたいと思えます。

【荒川】トランジションタウン府中は、5年くらい活動しています。初期は自分たちで自分たちの生活を変えていくという活動が中心で、ここ2年ほど市内の農地を守りたいというメンバーが増えてきて、「府中はたけ日和」を作り始めました。

2016年の府中市の市民提案型協働事業に応募して作った「府中はたけ日和」は、8ページくらいで農家さんのインタビューをしたり、あるいは飲食店や府中の野菜を使っているところを取材して、紹介する冊子です。

【水胤】私たちは紅葉丘にある高齢者の介護施設ですが、地域を知りたいと地域懇談会を開催して、そこで地域の皆さんと知り合うことができました。さらに地域の方がこども食堂をできないか、やってみようという声があり、とんとん拍子で進み、去年の夏休み前から月に1回か2回開催しています。そのうちに学習支援もという話があり、学習支援は毎週火曜日の夜、17時から19時まで、近所の子どもたちが来ています。教えることは元教師や大学生が担当してくれています。

【齋藤】株式会社セカンドファクトリーのCXOという体験最高責任者をしています。様々な大きな企業さんと仕事をする事が多く、システムの開発であったり、課題解決であったり、受託開発を中心にお客様の困りごとを一緒に考えていく仕事をしています。

私たち小さな会社は価格競争に巻き込まれ、仕事がなくなるのではないかなという様な危機感がありました。そこで、ユーザーにしっかり寄り添ったプロセスを大切に、共感から問題を発見、解決して、アイデアにつなげて価値を創造する「人間中心設計」に取り組んでいます。

そして色々としているうちに、地元府中に寄り添ってない、という問いが生まれました。

そこで、毎週の社内研修に市民の方を招いて、未来創造とか、価値創造というテーマで1年間やりました。市民の人が入ることがいい刺激になって、ある意味 win-win かなと思います。個人としても「ストリートラグビー」や「100年ごはん」自主上映などの市民活動をしています。まだ市民活動1年未満の初心者です。

【林】 それではパネルディスカッションに入りたいと思いますが、その前に市長の市民協働への熱い想いを伺いたと思います。

【高野】 まず市民協働の推進について、組織として市民協働推進本部を立ち上げ、市民協働宣言を行いました。そして、11月を市民協働推進月間として市民協働のシンポジウムを開催し、市民の皆さんの声を聞くなどして進めています。

市民の皆さんが行政に色々な声を寄せても、行政はそれに全部応えきることができない、加えて高齢化が進む、自然災害の発生も危惧されている。また、子育てをみんなでどうしていくかということは行政では答えが出しきれない。これが正直なところです。そういう前提があることから逃げられないと思っているところです。

【林】 先ほどの甲田さんのお話にもつながりますね。地域を豊かにするためには、行政の力だけではなく、市民自らが立ち上がらなければならない時代がきているのだと思います。

それではパネルディスカッションに入ります。まずは個人的なことをお聞かせいただきたいと思います。協働というものに皆さんが取り組むなかで、パネラーの皆さんが自分の変化や、こういうふうに変わったという点などを伺いたしたいと思います。

【齋藤】 街で知っている人に出会うことが多くなったというのが僕の中ではいちばん大きくて、お昼を食べていても「齋藤さん！」と声をかけられます。プラッツにくると3人か4人くらいは会えます。

たった2年。それを自分の変化と捉えると、知り合いがいて楽しいまち。まずはそこが最初かなと思いました。

【林】 甲田さん、いかがでしょうか。

【甲田】 私は子育てをする母親という立場からなのですが、娘に「いつもママは知らない人についていっちゃいけないよ、知らない人からもらったものは食べちゃいけないよ、困ったときはお友達を頼っていいんだよ、って言うてるのに、どうしてママがお仕事の時には、私は知らないところに行って、知らない人がつくったご飯をたべなきゃいけないの？」って言われたことがあるのですよ。さすがに、絶句しました。勝手に大人の都合で、「今日は有資格者のシッターさんが来てくれるんだから安心だ」なんて自分に言い聞かせていたんですが、娘にとっては赤の他人。我が子から「何が安心か」を教えてもらったのですね。それで、なんとか頑張って、子育てシェアで預かってもらえませんかと声を意識的にかけるよう、頼り相手を1人、2人と増やしていきました。子どもにとっては預けられているという感覚よりも遊びに行かせてもらえてる感覚になっていって、子ども自身が「〇〇ちゃんのママがバレエ教室の帰り送っていくよ、って言ってたよ」なんて、自分で頼り先を見つけてくるようになって、私もすごく楽になりました。

【林】子どものひと言って大きいですね。甲田さんだけでなくお子さまもご家族も変わっていくきっかけがあったのかなと思います。

荒川さん、いかがでしょうか。

【荒川】府中に住んで最初の5、6年くらいは市内をあまり移動してなかったのですが、今は自転車で市内中を走り回るようになって、どこに何町があるというのもだんだんわかってきました。知っているお店が増えたり、齋藤さんみたいに知り合いに会うことが増えたり、第二の地元になりつつあるなと思います。

【林】ありがとうございます。農家さんの中には荒川編集長の顔は知れ渡っているのではないかと思います。

水胤さんいかがでしょうか？

【水胤】私も府中の人間ではないですが、たまたまうちの法人が協同労働をもう30年前から理念としてやっていて、府中に来て子どもの居場所に関わるようになり、地域の方と知り合えたことで私自身も変わったなと思います。私一人でやっているわけではなくて、私たちは「あおばケアサービス」という場所を提供しているだけで、後はもう地域の方が積極的に協力し合ってやってくださるので、本業の仕事よりもそちらのほうが楽しいと思えるくらいです。こういう機会でない子どもと接することがないので、それも楽しいですし、また学習支援の現場をみるのも新鮮です。

【林】水胤さんにもいい変化があったということですね。

続きまして、組織や団体活動のことについて少し掘り下げてお聞きしたいと思います。まず市民団体のお二方からお聞きしたいと思います。はたけ日和は若い市民が集まってうまく行っているというイメージがあるのですが、その秘訣などを、荒川さんいかがでしょうか？

【荒川】はたけ日和を始める時にこういう目的で始めますというチラシを作ったのですが、SNSで発信して、やりたいことに共感してくれた人が集まってくれたのが大きいです。また、冊子の編集が主な作業なので、昔やっていたけれど子どもができて辞めてしまった方なども集まってくれました。

【林】水胤さんにお聞きしたいのですが、子どもの居場所には大学生などの若い人も集まっていると聞いていますが、どんな魅力でその方々が集まっているのか、その方たちが続けていけるために何か工夫されていることなどはあるのでしょうか？

【水胤】特に工夫はしていません。メンバーの方が地域の方で、大学生はほとんどが教師を目指しているので、将来の勉強になるということで集まっているのだと思います。特に宣伝は大々的にやっているわけではなく、スタッフの方が自分たちがやりたいという思いで集まっている方ばかりで、そういう人がまた次の人を呼んでくる、人が人を呼ぶ形で集まっていっしょるので、人集めに困っていることはありません。

【林】その場が充実しているということと、若い人達の将来に対する目標とマッチしているところが大きいと感じました。

次に企業のお二方にお聞きします。企業の方は、こういう市民や市民団体とは協働しやすい、企業として win-win の関係を築きやすいということを伺いたいです。

【甲田】私たちは企業さんと AsMama とママサポ、地域住人ですね。かかわる全ての人や団体それぞれが win-win-win であることをすごく意識しています。なので、ただ単にモノを売ってくれとか、言われたとおりに情報発信をしてくれればいいんだ、といった企業さんとは組まないです。一方で、市民団体さんや何かやりたいという人とは、一緒に協働するとはどういう事かという話を根気よくするようにしています。必ずどちらにとっても win があるか、どちらかが泣き寝入りするような状態になってないかを意識して協働するようにしています。

【林】win-win の関係が本当にぴったりする言葉だと思います。甲田さんのお話の中で頼る-頼られる関係というのもあったと思いますが、今までは市民側は企業や行政に頼るというのがメイン、企業や行政は頼られるというのがメインだったのが、今は企業も市民に頼るという姿勢を大切にできてきていると感じています。

【齋藤】やはり win-win のバランスを共に考えていけるような団体さんと一緒に、一歩ずつ関係を築いていきたいと思っています。人間中心設計でユーザーさんと寄り添って新しい価値を作っていく中で、府中の市民の方にちょっとお願いできたり、ローカルだからこそできることがあると思っています。気さくに関係性が生まれていくような団体さんと心でつながっているというのがポイントかなと思っています。

【林】高野市長にも聞きたいのですが、市民、市民団体、企業が互いに win-win の関係で市を盛り上げていく時に、行政の職員の方はどういう姿勢で市民協働に関わっていくのでしょうか。市の職員の方が市民団体に入って研修をするというシステムも始まったと聞いていますので、その辺のことも含めてお話いただきたいと思います。

【高野】市民の皆さんが新しいアイデアで地域の課題を解決しようと行政の窓口に来た時に「あれ？」と思うことは非常に多いと思います。行政には行政のこれまで培ってきた、積み上げてきた、公正で公平な役割がどうしても求められますし、国や東京都との連携で乗り越えられない縦割りの役割分担があります。そのことが、市民の皆様からの「私たちと考えが近くないね」という声としてよく伺います。そこで市としては、今までと違う行政の役割を求めてみようということ、職員一人ひとりが、いかにどうしたら協働の体制を作り上げることができるのかを念頭において市民の皆さんと対話することで、色んなことが出てくるのではないかと、今一生懸命進めているところです。

【林】行政の皆さんも市民活動や、市民の方と関わる中で、色々と変化を感じられたらいいのかなと思

います。

実際はいい話ばかりということではないと思うので、課題も聞かせていただきたい思います。

【水胤】学習支援に関しては、将来の府中を担う子どもたちのことなので、ボランティアだけでは限界があると思っています。長く責任をもって続けていくために、報酬の問題があります。今は学生に交通費程度しか払えていないので、リーダーとしての責任をもってやっていただく方にはある程度のお金が必要ではないかと思っています。今は民間の助成金でそれを運営しているのですが、そこら辺を行政と協働できたらと思っています。

【林】ボランティアでは限界がある、責任にはお金をという話はとても共感ができます。

【甲田】それぞれが望むものをどう提供していくかが大事だと思っています。自分がどう地域に役に立っているか実感が欲しい方にはやりがいとか関わりがいを提供する、その一方でパートに出ようとか、市民活動を続けていこうと思っている人には活動資金を提供します。

もうひとつ、夜のこの時間に市長がパネリストとして出てきて、協働の話をする市はまだまだ少なくて、市民協働は先進的なことだったりするのです。時代は変わっていて、一人ひとりが目指す子育てのあり方、働き方、生き方、地域貢献のあり方というのがあっていいんだという文化や考え方の変化を起こしていくことがすごく難しい。だからこそみんなで手と手を取り合って、得意を活かして私はこれができるよ、あなたは何を望んでいるのかというコミュニケーションが大切なのだいつも思っています。

【林】時代は変わっている、コミュニケーションが大事、すごく腑に落ちます。

【荒川】雑誌の編集作業はとても時間がかかってしまうので、じっくり話す時間がとれないのが最近の悩みですね。SNSでのコミュニケーションってなかなか文字にしづらいところもあるので、会って話す時間をどうバランスよく作っていくのかというのが今の課題です。

【林】齋藤さんもSNSを使われると思いますが、いかかでしょう？

【齋藤】はい。活字のコミュニケーションはすごくスキルがあるので、慣れてないと間違った伝わり方をしてしまいます。僕がすごく感謝しているのは、このプラッツ。プラッツに来ると誰にでもすぐに会えるし、ちょっとこっちの活動手伝ってよ、というようにいろんなことが渦を巻いて起こります。ここがないときは自分の会社のセカンドファクトリーで色々やっていたのですが、あえてこの場を使ってソーシャルとリアルのバランスを取るのが大事だと思いました。

【林】本当にこのプラッツという場所を使い倒していますね。

それでは、ここでまとめて入りたいと思います。パネリスト、市長も含めまして5人に市民協働をするにあたって自分がいちばん大切に思っている想い、矜持みたいなものを、紙に単語で記載していただきたいと思います。

【甲田】 ぐたいてきにうごく

私はひらがなで「ぐたいてきに」と書いてその下に「うごく」と書きました。こういったところに来られている方は、それだけで関心が高い方が多いのですが、参加はするけど、自分はやらないという方も少なくないのですね。しかし大事なのは参画し「ぐたいてきにうごく」ことだと思っています。

【荒川】 やりたいことをで きるとき

なんかピンときて自分に余裕があったら是非参加してみてくださいということで、無理をしないで、お仕事とか家庭とかを大事にしながら、活動していくことが、いちばん大事だと思っています。

【水胤】 できることから

私もよく似ているのですが、強制はしないでできる事をゆっくりと、ということを中心にしています。

【齋藤】 WIN-WIN

今日のスライドにたくさんあった win-win を挙げました。なんらかの関わり合いによってお互いに価値を感じている関係性があるって、そこから信頼が生まれてきて次のステップが見つかるようなことを企業としても個人としても続けていきたいと思っています。

【高野】 愛着

「愛着」という字を書きました。協働の事業をしよう、そして何か人の為に役に立つことをしよう、それはすべてこの愛着というものが形成されるか、されないかによって一歩が出るか出ないかの違いがあるのではないかと常に思っています。

【林】 市民協働に関わる中で、愛着がますます増して、それがまた市民活動を活性化させていく、すごくいい流れができてきているのかと思います。愛着、本当に府中は素晴らしい場所だと思うので、そういう方達をさらに増やしていくことがこれからの府中、地域をよくしていくことなのではないかと感じました。ありがとうございます。

【田代】 林さん、コーディネートをありがとうございました。パネリストの皆様、貴重なお話をありがとうございました。一人ではできないこと、一社ではできないこと、みんなでつながることによってできそうな気持ちが満ち溢れてきたように感じます。活動のヒントを沢山いただきました。ありがとうございました。